

ダイに大転生

液体クラゲ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気が付いたらダイだった。

どうやら俺がバーンを倒すしかないらしい。

そんなわけで、レベルを上げて物理で殴るお話。

※息抜きで書いてます。

目次

1	輝け！ ゴメちゃん！	1
2	デルパしない！ イルイらない！	4
3	大爆発	8
4	善と悪の狭間で	12
5	勇者の家庭狂死	16
6	獣王の悲しみ	20
7	さらば！ 獣王クロコダイン	24
8	負ける戦士ヒュンケル	28
9	さらば！ 不死騎団	32
10	恐怖の禁呪法！	37
11	魔王軍総攻撃!!!	42
12	繋ぎ回	47
13	超竜軍団もう来ないで	52
14	紋章共鳴の脅威!!	57
15	人は皆心にゴリラを飼ってる	61
16	さらば！ 魔影参謀ミストバーン	65
17 (最終)	さらば！ 大魔王バーン	70

1 輝け！ ゴメちゃん！

おれはダイ！ この島でたったひとりの人間だっ！！

まあ竜ドラゴンの騎士だから人間じゃないけど。

いやハーフだから2/3くらいは人間なのか。人間でいいや。でもそんなことはどうでもいいんだ。重要なことじゃない。

気が付いたらデルムリン島にいて、ダイと呼ばれて、ブラスじいちやんと暮らしていた。

しかし何か忘れているような気がして、ずっとモヤモヤして気持ち悪かったのだ。助けてゴメちゃん！ 助けてもらえた。めっちゃ前世の記憶蘇ってきたよね。ゴメちゃんはぱあーって光ってた。ゴメンな。これはダジャレだけだ。

それでダイに転生？ 憑依？ してしまったことを自覚したわけ。どっちだ……？

ゴメちゃんどっちだと思う？ ぱあー。ほう、転生。なるほどね。

つまりもしも「俺の精神を元の世界に戻してくれー！」って願ったところで、俺は戻れるが、それで『今ここにいるダイ』は空っぽになってしまうということだ。これはいただけじゃない。残されるブラスじいちやんが可哀想過ぎる。

だからこの際、ダイとして生きるのはいい。

でもこれ、結局俺がバーンやつつけないと、地上が吹っ飛ぶってことだよな……？

え、マジで……？

いやでも、俺が転生してる時点で原作とは違うだろう。バーンも襲ってこないかも。

その辺どうなのゴメちゃん？ ぱあー。あ、なんか未来のヴィジョン見えてきたわ。地上めっちゃ吹っ飛んでるわ。大魔王が高笑いしてるわ。死ぬわ（絶望）。

よし、戦おう！ これは侵略です！ 侵略には戦います！

島の人みんなには平和を楽しんでほしいな。

問題は中身クソ一般人の俺がどこまでやれるか、ということだ。頑張ったけどできませんでした〜じゃ事は済まない。

仲間の問題もある。

クロコとかヒュンケルとか、もちろんポップやマアムの存在もあったが、何だかんだでダイの太陽の精神性に惹かれたことも仲間になった大きな理由だろう。

で、ないんだよね。太陽の精神性。俺だからね。

絶対仲間にできないよね。バランとの和解とかも無理そう。絶対どっちか死ぬわ。

結論、俺が強くなるしかない。力が正義だっ!!

じゃあどうやって強くなるか。

呪文はプラスじいちゃんに教えてもらえらるとして、いや、ダイつてその辺才能ないんだっけ。中身が俺だから行けるか？ 中身が俺だから無理か。はい。

剣は才能あるって話だったけど、この島じゃ剣を使う奴はいないから教われない。

あ、格闘ならどうだろう？ 暴れ猿とかゴーレムとか、先生になつてくれそうじゃない？

じゃあとりあえず、技を教わりつつ、基礎練として1日1万回の正拳突きから始めるか。

応援してくれ、ゴメちゃん！

ばああー。

よっしやあ!!!! なんかめっちゃやる気出てきた!!!!!!!
言うて最初の日は100回で死んだ。!!!!!!!

だが次の日は200回行けたし、更に次の日は300回行けた。そして500回、800回、1300回——やればやるほど、体力も筋力も根性もついてくる。

1万回を超えてからも俺は続けた。そのうち数えるのが面倒になって、回数ではなく時間数で計るようになったが、まあたぶん1日数万回以上は打つようになったんじゃないかな。

もう秒間10発は余裕だし。

「のうダイ」

「なに？　じいちゃん」

ブラスじいちゃんが現実逃避の目で見てくる。

俺の正拳突き祭にドン引きしているらしい。

照れる。

「ゴメの奴、最近縮んどらんか？」

「ね。ダイエツトかな」

「ピーー」

ゴメんで。

あ、ゴメンテって呪文みたい。ゴメ犠牲呪文。

「ピーー！　ピーー！！」

痛い、痛い。

ごめんなさい、調子こきました。

実際、感謝してるよ。これ以上は縮ませねえ。

ハッピーな未来を迎えてやるぜ!!!

2 デルパしない！ イルイらない！

そうして何年もが経った。

ある日、でろりん一味の船が訪れた。遂に来たか。

しかし悪そうなツラしてんな。望遠鏡越しに見て、本当にそう思う。

人は見た目じゃないなんて言うが、何だかんだ内面は見た目に表れるものだ。

さて、わざわざ船に乗り込みには行かず、海岸で島の皆と一緒に待った。

何しろこの島に船が来るなど、俺が流れ着いて以来だ。珍しい光景は、皆で一緒に見て楽しみたい。そうだろ？

彼らは船を停泊させると、ボートに乗り換えて海岸までやって来た。

大小様々種々雑多な怪物モンスターの群れに出迎えられて、少し引きながら警戒もしている様子だ。

実力はそこそこあるんだから、堂々とすればいいのに……。

そう思っているうちに、俺の頭の上で輝くゴメちゃんに気付いたよ
うだ。

彼らはニヤリと笑んだ。

「初めまして……そしてサヨナラだ！ 怪物ども！」

でろりんが剣を抜き、斬りかかってきた。

刃を指で摘まんで止め、捻ってへし折る。

「えっ……」

そしてソフトめに正拳突き。

でろりんは海を割って吹っ飛び、乗ってきた船に突き刺さった。

「ようこそ、デルムリン島へ。ご用件は？」

それから両手を広げて歓迎する。

残りの3人はガクガク震えながら、必死に首を振った。

歓迎の意は伝わったのだろうか？

「「お、お、お邪魔しましたくくくく!!!」」

物凄い勢いで帰っていった。

さよくならく。

「何だったんじゃ……?」

「ゴメちゃん超絶レアモンスみたいだし、攫いに来たんじやない? めっちゃ見てたし」

「なるほどのう」

「ピーー」

この日はこれで解散した。

そしてしばらく後、また船がやって来た。

今度は揃いの制服を着て槍を持った——兵士かな。兵士がいつぱい乗っている。

あと文官だろうか、なんか賢そうな人（絶望的に賢くなさそうな形容）。

俺たちはまた総出で歓迎した。

人間たちはめちやくちや警戒しながらも、何とか平静を装っている様子。

文官の人が挨拶してくれた。

「先日でろりん一味がこの島に訪れたということですが」

偽勇者を本物の勇者と思い持て囃していた結果、この島にも迷惑をかけた、ということだ。詫びに来たらしい。なんて礼儀正しい国なんだ。

もちろん快く赦した。誰も被害に遭ってないしね。むしろでろりん生きてた? ああ、生きてたの。良かった。流石に人殺しはな。

「ついてはお詫びの印として、でろりん一味に下賜する予定だったこの『覇者の冠』を」

「マジかよ」

国宝とかじゃないの、これ? オリハルコン製でしょ?

原作でもスゲーあっさりあげてたけど。

それともこの世界じゃ違うのだろうか。

俺は覇者の冠を掴まんで曲げてみた。

ぺきんっ。

「……」

「……」

「ごめんなさい」

オリハルコンじゃないの……？

「オリハルコンを……へし折った……？」

オリハルコンなのかよ。

まあダイ大のオリハルコンって結構脆いからね。仕方ないね。

だからってこうも軽く折れるとは思わなかったけど。

「代金はふたつ分払うんで、新しいのに替えてもらっていいツスか？」

「ねえよ」

ですよねー。

「いえ、まあ、差し上げたモノですから。どう扱おうと自由ですが……。できれば丁重に……あつ、無理にくつつけようとしなくて！」

砕けちゃうー！」

いや、大丈夫だから。圧力かけたら温度上がるべ？ それで溶接――

――ほらできた！

「ええ……」

ちよつと不格好だけどき。まあディテールは追々ね。今はこんなもんでね。

俺は覇者の冠を装備した。

溶接したところが微妙に盛り上がってて、肌にゴツゴツする。付け心地悪い。

俺は覇者の冠を外した。

「これ1から作り直していいツスか？」

「もう好きにしてください……」

ロモス王国の使者は帰っていった。

死者みてーな土気色のツラのまま。

あ、これはダジャレだけど。

「ダイや」

傍らで呆然と見ていたブラスじいちゃんが、神妙な顔で言う。

「なん？」

「すまんんだ。常識を教える必要があったようじゃ」
「知ってるけど」

「知ってるだけじゃ無意味なんじゃよなあ……」

難しいね、世の中って。

反省。

3 大爆発

覇者の冠だったオリトルコン塊を粘土代わりに捏ね、遊びながら鍛えていると、三度船の接近があった。

「って軍艦じゃねーか!!!」

「めっちゃ大砲ついてねよ!!!」

「ブラスじいちゃん!」軍艦だ! 軍艦が攻めてきた〜!!!」

「なんじゃとお!?」

食事中だったところを驚かせてしまい、飯を嘔き出された。

空中で全てキヤッチし、そっとお椀に戻した。

ふたりに船を確認しに行く。未だ沖にあるため、望遠鏡を使い――

「バカタレ! 何が軍艦じゃ早とちりしおつて!」

あれぞまさしく聖なる船らしい。

「でもめっちゃ大砲ついてるよね? 軍艦同然だよね?」

「……まあの……」

「だよね??」

まあ実際、船は発砲して来なかった。それならそれでいい。

やがて停泊した船からは、怪しげなローブの兵士たちと、冷たそうな目の男、そしてハゲが降りてきた。

ハゲが言う。

「ゴリラの勇者ダイくん。それにブラス老ですな……」

「おい、誰が考えた二つ名だよ。捻り殺すぞ」

「ゴリラは森の賢者なんだぞ!」

「ゴリラさんに失礼だろうが!

しかし俺は無視された。

代わりに言うては何だが、地味に露出の多い美少女が出て来る。

わおっ。

「あなたが……ゴ——勇者ダイ?」

「今ゴリラって言いかけたろ。ゴリラって言いかけたろ!」

「どんなゴリラかと思ったら、意外と小さいのね」

「もう完全にゴリラって言ったよね?」

「もう完全にゴリラって言ったよね?」

ちよつと覇者の冠を捻り殺しただけじゃないか！

まあそれはともかく。

何でも口モス王からこの島のことを聞き、レオナ王女の儀式のために赴いたらしい。そうそう、そんな話だったよね。でも島に来るの久し振りで地理が分からんから、現地民の俺に案内してほしいと。はいはい。

いいともよ。しかし気になることがある。

「お代は如何ほどいただけるんで？」

ということだ。

そしたらブラスじいちゃんに殴られてしまった。名誉なことなのに何言ってるんだと。

しかし考えてもみてほしい。こんな最果ての地で、人の世の名誉もクソもねえもんである。そんなことより美味しいモノをくれ。

「ではこれを」

バナナをもらった。

剥いて食べた。

美味しかったです。

それを見てレオナが不機嫌そうに言う。

「キミィ……本当に大丈夫!? 途中で迷子になっちゃったりしたら置いてくわよ」

「そういうこと言う奴に限って、あとから泣き言囀るんだよな。とりあえず服用意するから着替えろや」

と言うのも、露出度が高過ぎる。肩も腿も全開で。森を舐め過ぎだ。

細かい枝葉に引っ掛けて肌を切ったり、いつの間にかヒルに噛み付かれていたりするハメになる。

怪物島とは言え、怪物しか住んでないワケではない。でないと肉食の奴らが困るしね。普通の動物や虫なんかもある。毒虫もいるし、毒草もある。

レオナはボロマントを纏って、逆に機嫌が良さそうだ。

俺が言うのも何だけど臭くない？ それ。大丈夫？

「意外と頼りになりそうじゃない。腕力以外も」

一言余計だわ。

「じゃあ他に何か特技あるの？ 魔法とか」

両手を思い切り叩き合わせた。掌の狭間で圧縮された空気が赤熱し、一瞬、炎が生じる。

「メラだ」

「今のはメラじゃないわ……」

今のはメラではない……。

今のはメラではない……。

「何だっけ……」

「知らないわよ」

まあちよつと仲良くはなれた。道中なかなか話が弾んだものである。

しかしいきなり魔のサソリが襲ってきたので手刀で真つ二つにし、更に洞穴の奥に向かおうとしたところで、突如の轟音と共に洞穴の出口が崩れて塞がってしまった。

外から攻撃されたようだ。

「ちよつと、何よこれ!？」

「暗殺じゃない?」

「そうか、世継ぎの私を亡き者にすることで国の実権を握ろうと！
テムジン……!!」

洞察力高いな、この王女さま。

「でもどうしよう、閉じ込められたワケよね。ダイ君、どこか別の道は——」

「オラア!!!」

崩壊した出口を正拳突きで吹き飛ばして開通させた。

「今のはイオラかしら」

「オラアって掛け声でダジャレをしたつもりはないよ!! 微妙だしね！ 悪かったよ、さっきのメラは確かにメラじゃないよ……。ごめんね」

「微妙で悪かったわね」

さて、じいちゃんが心配だ。

来た道に戻って海まで行くと、ちょうど船が内から吹っ飛んでキラマシーンが出て来るところだった。

「ダイ、逃げろ！ そいつはキラマシーン！ 勇者を殺すために生まれた殺人機械じゃ！ 殺されるぞー！」

「マジで？ パねえな」

とりあえずぶん殴ると、粉々に碎け散った。

拳圧が大気を断熱圧縮して莫大な熱量を孕み、爆発に至ったのだ。そして焦げカスと化したバロンが落ちてきた。

「ベギラマだ」

「今のはベギラマじゃないわ……」

その後何やかんやあって、テムジンとバロンはお縄。

レオナ姫も無事に儀式を終えてめでたしめでたしだ。

「ねえダイ君、あたしのボディガードやらない？ 日当バナナ5束で」

「は？ 舐めんな。10束だろ」

お礼にバナナの木を貰いました。

やったあ。植えて増やすぞー!!!

4 善と悪の狭間で

いきなり島の皆が狂暴化したので、軽く撫でて昏倒させ、この日のためにクツソたくさん作っておいた縄で拘束していく。

呪文を使う奴は、けいけつ経穴を突いて呪文も封じた。正拳突き祭で『心身をどう弄ればどうなるのか』の悟りを開いてしまつてから、なんか出来るようになった技だ。てんけつ点穴つてやつ。まあひこう秘孔だ、要するに。

しかしこれは对症療法に過ぎない。狂暴化そのものは魔王の邪悪な意志による外因性の現象で、皆の体の方をどうこうしても限度があるのだ。

アバンが来てくれればいいのだが……。

「じいちゃん！ 何か手はない？」

「う、うう……ダイ……！ に、逃げろ……!!」

「いやそれ以外で」

この島捨てて逃げるとかあり得んわ。

「この感じは……ワシには分かる！ 魔王が復活したのじゃ！ このままでは、ワシらはお前を殺してしまう……!!」

「物理的に無理じゃない？」

「……まあ……」

ガチで島全部を纏めて相手にして無傷で圧勝できるからね。

しかしプラスじいちゃんは苦しそうだ。必死に抵抗している。

「し、しかし、だとしてもじゃ！ お前を攻撃しようとすること自体、考えることすらおぞましい！ 早く……ワシが耐えられるうちに！」

「プラスじいちゃん……」

体が傷付こうが傷付くまいが、確かに、攻撃されれば心は傷付く。そしてじいちゃんの心も、攻撃しようとするれば傷付くのだ。

まあ俺は鋼の心を持つてるから、普通にじいちゃんを昏倒させるけどな。

「アバァッ!?!」

更に縛つて、呪文封じの点穴も施して——と。

そこでふとゴメちゃんが頭に止まつた。

「ペイ？」

力を貸そうか、と？

「いや、もうちよつと粘ってから……。助けが来るハズなんだ。もし運命ってモノがあるんならな。もしそうなりや、お前は縮まり損になつちまう。今は力を温存してくれ」

「ペイ！」

とうとう全ての怪物たちを拘束し終わると、あとはまあ準備をして、海岸で三角座りをして待った。

そして運命はあつた。

小舟がやって来たのだ。

「君がダイ君ですね。初めまして、私はアバン」

「おれは弟子のポップ」

「ダイです」

「この状況は……」

アバンは目を丸くした。

そりや全員綺麗に昏倒して拘束されてりやね。

あまつさえ、島全体を覆う五芒星魔法陣も先に描いておいた。手間が省けていいと思って。

「予知能力者ですか？」

「いいえ」

釈然としないながらも、アバンはマホカトールを使ってくれた。

そしたら今度は、皆の縄を解いて、点穴を解除して、軽く撫でて目を覚まさせていく。

「これだけの準備能力と特技を持つダイ君に、今更私が何か教えることがある気はしませんか……」

レオナに頼まれたそうだ。呪文を使える立派な勇者にしてやってくれと。

メラもイオラもベギラマも使ってみせたのに……。全部物理だけだ。

と、そうこうする場にガーゴイルが2匹襲来してきた。

ポップがメラゾーマで1匹を焦げカスにし、もう1匹のマホトーン

で無力化させられる流れを挟み、今度は俺が相手をすることになる。だがちよつと待つてほしい。怪物の皆つて魔王の邪悪な意志に操られてるワケでしょ？　じゃあ殺すの可哀想じゃない？　俺はそう思った。

そこでガーゴイルをアイアンクローで掴むと、マホカトル結界へと引き摺っていく。

「小僧！　放せえー!!」

「違うだろ！　お前が放せつて言うべきは、魔王の邪悪な意志に対してなんだ！　待つてろ、今俺が助けてやるから!!!」

ガーゴイルの剣を肉体強度任せで跳ね返しながら引き摺る。

まず俺が、結界の外から中へと戻つた。

そして引き摺られるガーゴイルが、

「うぎゃああああああああああああああああ!!!」

結界に引つかかった。めっちゃバリバリいつてる。そういえば、さつき襲つてきた時もそうだったよね。

うーん、邪悪な意志が強いせいかな？　島の皆は狂暴化してたけど、こいつは自我のある『兵士』だもんな。

それでも結界の内側にさえ入れてしまえば！　俺はもつと引つ張つた。

「やめ、やめてええええ死んじやううううう!!!　ごめんなさい!!」

「ごめんなさいい!!!」

「うるせえオラア!!!」

「ぬわーっ!!!H!!」

ガーゴイルAは生きて結界を通り抜けられず、焦げカスになつて死んだ。

俺は膝から崩れ落ちた。

「こ、こんな……こんなことになるなんて!!!　すまない、すまない……!!!　お前の心を、取り戻せないばかりか……命まで……っ!!　うおおおおお……っっ!!!」

俺は泣いた。男泣きだった。

「ダイ君……」

アバンがそつと肩を叩いてくる。

「今のガーゴイルは、もともと邪悪な魔物ですよ」

「先に言えや」

泣き損じやねーか。

ぺっ。焦げカスに唾を吐き、足蹴にする。

ともあれ、アバンに修行をつけてもらうことになった。

5 勇者の家庭狂死

そして厳しい修行が始まった！

アバン流牙殺法（鉄の爪とかのやつ）を素手で極め、メラゾーマとザオラルを覚えるのに1日もかかってしまった。

「ダイ君……もう君に教えることは殆どありません」

「まだ呪文2個しか使えないんですけど」

「言っておきますが、地面を殴りつけて地下のマグマ溜まりを刺激し、火山の噴火を引き起こすことをメラゾーマとは呼びません」

「マジで？ 困るすね」

それじゃ俺メラゾーマ覚えてないじゃん。

「それとその光景にショックを受けて心臓が止まったブラスさんを救った心臓マツサージ、実に見事な技術でしたが、あれもザオラルとは呼びません」

「そっかあ」

危うくじいちゃん不孝者になるところだったよね。

マジで危なかった。心肺蘇生、みんなも習っておこう！

「でも待つてよ先生、じゃあ俺呪文1個も覚えてないんじゃないすか。まだ教えること幾らでもあるでしょ」

「君に魔法力はないようです」

「マジで？ 困るすね」

転生者だからかな？

ギガブレイクとかやりたかったんだけど。

まあいいか。

「しかし君ほどの実力があれば、呪文が使えない程度は何てこともないでしょう。あとは旅や冒険の心得を少し学べば充分です」

「やったあ」

旅や冒険の心得を学んだ！

知らない人にはついていっちゃいけません、とかね。

ぼったくりには気を付けよう、とか。

手早く美味しい野外科理、とか。

そんな感じで3日目。

突如として大気が鳴動し、地震が巻き起こる。

「これは何者かが島の魔法陣を破ろうとしているのです!」
マジかよ。

思っている間に、ローブを纏った怪しげな人影が上空に出現した。
下りてくる——ズドン!!! そいつは地面に着弾し、隕石めいてク
レーターを作った。

衝撃波と土砂が吹き荒れる。

「やはり復活していたか……! 魔王ハドラー!!」

「久しいな、勇者アバン……!!」

ふたりは知り合いな空気を出している。

だが俺には、~~ほん~~んなことはどうでも良かった。

バナナの木が!!!!

レオナを助けたお礼にもらったバナナの木が、ハドラー着地の衝撃
で何本も薙ぎ倒されて!!!

「あ、ああ……うああああ……!!!」

俺は膝から崩れ落ちて泣いた。男泣きだった。

「ふん、恐怖に屈したか……!」

ハドラーが何か言っている。

おのれハドラー!!! ちくしょう絶対ゆるさねえ!!!!!!

「うおおおおおおお……!!!」

俺は吼えた。

なんか視界が明るい、て言うか眩しい。額でめっちゃなんか光つて
る。ヘッドライトかよ。

だがそんなことはどうでもいいんだ。重要なことじゃない。

「俺は怒ったぞ——!!!」
ハドラー——!!!」

「何だこいつ急に!」

ハドラーは鼻水を垂らした。

しかしすぐに威勢を取り戻す。

「ガキめが! 怒ったから何だと言うのだ!! このオレを倒せるとで
もどうぶつはあああああああああああああああああああああ

美味しくなかったです。

ともあれ、危機は去った。

ついでに核晶に溜まっていた魔法力を吸収できたらしく、体内に新しい力が漲っているのを感じる。

「先生！ これで俺も呪文が使えるそうすよ！ 教えてください！」

「ええ……。しかし明日にしましょう」

明日になった。

アバン先生はいなかった。

探さないでください、と書かれた手紙だけが残っていた。

「お前強過ぎてキモいからな。先生も心が折れたんだろう」

ポップはそう言った。

ともあれ、バーンを倒すため、アバン先生を探すため、旅に出ることになった。

「行くぞ、お前ら！ 俺たちの冒険は、ここから始まる……!!」

「ピーー!!」

「たぶんお前の傍が世界でいちばん安全だしな。ついてくよ」

「オレに黒の核晶を埋め込むなど……!! バーン赦すまじ!!!! オレも

行くぞ!!!」

ポップが仲間に加わった！

ハドラーが仲間に加わった！

俺たちの冒険は、まだ始まったばかりだ!!!

まあバナナの木の恨みは忘れてないけどな。

黒の核晶の件は可哀想だから、点穴で再生促して助けてやったけど……。

次になにかしたら殺す。

「マアムが肩に手を置いてきた。」

「なんで無視するわけ?!?」

「長くなりそうだったから……。早くミーナちゃんお家に帰してあげたいし」

「当たり前だよなあ?」

「魔王を連れ歩いてるような人を村に入れられるワケないじゃない!」

「だからオレはもう魔王では」

「元魔王を連れ歩いてるような人を村に入れられるワケないじゃない!」

「それでいい」

「入村拒否自体はいいのね?!?!」

「残当。」

「俺は領いた。」

「待ってくれ!」

「ポップが前に出てきた。」

「おれたちは大魔王バーンを討伐しようって一行だぜ。ここは村で歓迎してくれた方がいいんじゃないか? のちのち、宿屋が勇者御用達ってことで繁盛するぜ」

「世界中を旅して、立ち寄った全部の宿屋を御用達にするの?」

「ポップは黙った。」

「先生からアウトドアの技は習ったし、野宿でも何とかなるって。行こうぜポップ、ハドラー」

「仕方ねえな」

「うむ」

「こうして俺たちはマアムと別れ、森を彷徨うことになったのだが、その夜のことだ。」

「猛々しい遠吠えが聞こえ——それがどんどん近付いてくるではないか!」

「間もなく、大樹を割って巨躯のワニ男が姿を現した。」

「我が名は獣王クロコダイーン!! 先ごろ魔軍司令に昇格したミスト

クロコダイン（全裸）は殺せ殺せと言いながら必死に追ってきたが、そのうちどンドン距離が開いていき、やがて振り向いても見えなくなつた。

それでもウオオオオオオオン殺せええええええええええって、真夜中の森に響いて聞こえてくる。

怖かったです。

7 さらば！ 獣王クロコダイ

「キィッヒッヒッヒ！ この妖魔司教ザボエラの手にかかれば、マホカトールの結界をすり抜ける程度は造作もないこと……！ さあ、鬼面道士プラスよ！ ワシと共に来てもらおう！」

その方向には誰もいない。

「つてバカな!? 勇者ダイの育て親がいらないじゃと!? サクツと人質兼兵士に変えて、クロコダイにダイを攻略させる策が……！ いたいどういことなんじゃあ!!」

なお『サクツ』は『策』とかかっているダジャレである。



「——つてゆるー感じに、今頃なつてると思う」

ロモスの宿屋で、俺はポップとハドラーに言った。

マアム？ ネイル村を守ってるんじゃない？

「なるほどなあ。それでプラスじいさんを魔法の筒に入れて……」

「確かにザボエラがやりそうなことだ」

プラスじいちゃん入りの魔法の筒を磨きながら、だ。

中は狭いこと以外は結構快適で、腹も減らないらしい。

筒から出すと魔王の邪悪な意志に操られちゃうから、ここでは出せないんだけど。

そこでポップが疑問を持った。

「でも島には他の怪物モンスターもいっぱいいたろ？ 代わりにそいつら攫ってくるかも知れないぜ」

「いやー意味ないだろ、みんなが狂暴化した時つて、マジで狂暴化して同士討ちしてたもん。あれじゃ人質にも兵士にも適さないよ。それは先方も分かるんじゃないかな」

まあ希望的観測だが。

言うて全員を冒険に持ち運ぶには、魔法の筒が足りないし。そこは仕方ない。

「ピーー」

「いやゴメちゃんの力で魔法の筒増やすのもね……。微妙なところだ
けどさ」

クロコダインに使わせることを考えると、やっぱり誰か1体が限度
だろう。

そしてそれなら、ブラスじいちゃんほどの適任はいない。で、その
ブラスじいちゃんがないのだ。

ザボエラが諦めてくれることを祈ろう。

ともあれ、翌日。

「出て来いダイ!! さもなくば——ロモス王国は今日で壊滅だ!!」

朝っぱらからクソデカイ声で叩き起こされた。

この声はクツコロダイン……!!

俺は窓を開けて叫んだ。

「俺は……だ……」

口の中で音波を無数に反射させて指向性を高め、上空に向けた大音
声は、空飛ぶ百獣魔団の三半規管を揺らしに揺らし、地上に墜落さ
せた。

「ぐわあああああああああああああ!!!」

ガルーダに掴まれたクロコダイン（全裸ではない）も墜落した。

ちょうど宿屋の前の通りだ。

「ポップ、ハドラー、雑魚を頼む。俺はあのワニに引導を渡すから」

「えっ、別行動？ やだよ、お前の傍が世界一安全だから、おれはつい
てきたんだぜ」

ポップが不平を述べた。

「お前にとってだけ世界一危険な場所にするのもヤブサカではないん
だが」

「この大魔法使いポップに任せろっ!!」

ポップは飛び出していった。

「オレが人間を守ることになるとはな……!」

ハドラーも晴れがましい顔で飛び出していった。

雑魚を頼んでおいて何だが、何でこいつ味方ヅラしてやがるんだ。

まあいいか。俺も宿屋を飛び出した。

「クロコダイン!!」

「来たか、ダイ!! どうやら、オレはお前に敵わない……だが勝たねば誇りを守れん!! コイツを使わせてもらおう……!!」

あれは魔法の筒!

結局誰か攫われてきてしまったのか。

いったい誰が……!?

「出ですよ! デルパツ!!」

煙と共に出てきたのは——木だった。

木の魔物、ウドラーだとか、そういう意味ではない。

それはバナナの木だった。

ハドラーに殆どが薙ぎ倒された中で、唯一無事だった最後の1本!!!
あ、ウドラーとハドラーって似てるな。とか考えてる場合じゃない!

!

「コイツの命が惜しければ、抵抗はやめるんだな……! ダイ!!」

「あ、ああ……うああああ……!!!」

俺は膝から崩れ落ちて泣いた。

コイツを見捨てることはできない! ヤバい! 勝てない……!!!

だが俺が死んだところで、コイツを元通りに島に植えてくれるワケ
では!!……いやでも、だからって……ああああああああああ

ああ!!!

「本当にキモいくらい効くな……。なぜこんなモノが……。まあいい。動くなよ……」

クロコダインは左手でバナナの木を持ち、いつでも握り潰せる体勢。

そして右手の真空の斧を振り上げ、力を溜め——全力で俺に振り下ろした!

俺はバナ次郎を犠牲にはできない。レオナとの友好の証を……!!

だがここで俺が死んだら、散っていったバナナたちに申し訳が立た

ない……!!

ならばクロコが諦めるまで、身を固めて防御だけし続けてやる!!

俺は覚悟を決めた。

「さらばだ、ダイーーーーー」!!!!!!」

俺の頭に真空の斧が直撃した。!!!!!!」

そして斧は守備力の高さにかけて爆発、反動で無数の破片がクロココの方に跳ね返った。!!!!!!」

「ぐわあああああああああああああああああああああああああああ」

破片の散弾は、ワニの鎧を穿ち、肉を貫き、骨を爆ぜさせ!!!!!!」

クロコダインは粉々に砕け散った。!!!!!!」
原形を残しているのは、斧を持っていた右手と、バナナの木を握っていた左手、そして物凄い形相の頭部だけ。

それらが血肉の海に落ちている。

俺はそつと彼の目を閉じさせた……。

8 負ける戦士ヒュンケル

クロコダインの断末魔の「ぐわああああ!!」を聞いた百獣魔団は、一目散に逃げていった。ポップとハドラーの活躍により、被害者は少なかったようだ。

助けた住民に感謝され、ハドラーは満更でもなさそうなツラをしていた。丸くなり過ぎだろ。

その後、ハドラーのルーラでデルムリン島に戻った俺たちは、バナナの木を元通りに植え直すと、今度は一路パプニカに向かった。走って。

「おれたち抱えて海面を走れるとか、おまえってほんとキモいよな」

「問題はない！ 15万kmまでなら!!」

「それ実際に計ったのか？」

どの方角にどのくらい行けばいいのかはハドラーに教わった。

元魔王で元魔軍司令のコイツは、地上征服を目指すに当たって地理に詳しくなっていたのだ。

ルーラで行ければ良かったのだが、ハドラーが覚えているパプニカの光景は、15年前に自分の軍勢が破壊したモノだけなので無理だった。

地底魔城なら飛べそうだったが、いきなり不死騎団の本拠地に行くのもアレだし。

辿り着いたパプニカはボロボロだった。人っ子ひとりいない。

原作より早くついたと思うけど、この時点で既に滅んでいたのか。

「レオナ……無事だろうか!」

「こりやひでえや……。ダイにや悪いけど、生き残りはいねえだろうな」

「少しは慰めろや」

ポップの脛を優しく蹴る。

と、瓦礫の下から骸骨たちが現れた。

「オラア!!」

拳圧で全て粉々に吹き飛ばした。

直後、骸骨たちがいた場所に別方向から重い剣圧が突き刺さり、地面が爆発する。

「い、今のは……!?!」

驚くポップに解説してやることにした。

「助太刀しようとしたら一拍遅れて、もう敵がいなくてところに攻撃が当たってしまったんだろう」

「これは恥ずかしいな……。オレなら耐えられん」

「そんなこと言うなよ！ 可哀想だろ！ 誰だって間が悪いときくらいあるじゃねえか！」

ポップが必死に庇った。

だが庇えば庇うほど、庇われた側はより惨めになっていくモノである。

しかもそいつは、離れた高所にひとり佇むという、めちやくちやカッコいい位置取りをしていたのだ。

恥ずかしさは逆に一入ひとしおだろう。

「あいつだ!!」

ポップが指さしたのは、慌てて物陰に隠れようとする銀髪の男の姿だった。

どう見てもヒュンケルだ。

「そこで隠れたら余計恥ずかしいだろうが……。大地斬の使い手よ」
ヒュンケルが出てきた。

飛び下り、近寄ってくる。

「オレの技を見抜くとは……。アバンを知る者か？」

「おれはアバン先生の弟子のポップ」

「ダイです」

「ハドラーだ」

「つてなぜ普通に貴様がいる!!! ハドラー!!!」

ヒュンケルはハドラーに掴みかからんばかりの勢いだ。

一方ハドラーはどこ吹く風。

「おお！ 誰かと思えばヒュンケルではないか。ククツ……。助太刀し損ねて残念だったな」

「でも一度はアバン先生に殺されたからな。そこで一旦はチャラかなって……。バルトスに裏切られて先生を通して、バーンに裏切られて黒の核晶^{コア}を埋められて……。可哀想だしさ……」

「まあな……」

「やめろ！ オレを憐れみの目で見るな！」

俺はハドラーをよしよしと撫でた。

なんかもうペットみたいで可愛く思えてきたわ。

「やめろ！ オレをそんな目で見るなー!!!」

9 さらば！ 不死騎団

ヒュンケルは殴り飛ばしたが、不死騎団そのものは健在である。

俺たちは、奴らの本拠地である——とハドラーがリークした地底魔城へと、ハドラーのルーラで向かった。

実にハドラーさまさまだな。逆にポップって何か役に立ったわけ……？

「ここが地底魔城か」

「その闘技場だ。変わらん……」

地底魔城の地上に露出した部分、原作ではヒュンケルとの決戦が行われた闘技場を下り立った。ハドラーとしては、通常の出入口より印象深いのだろう。

普段は用のない場所なのか、不死騎団の姿はない。

だが内部に意識を向ければ、無数の邪気を感じる。

「どうする？ 突入するのか？」

ポップが怖気づきながら言った。

俺はとりあえずコツコツと地面を叩き、反響を確かめる。

「何してるんだ？」

「ああ、ちよつとな。メラゾーマ……」

「げえーっ!!! その技は!!!」

愕然とするポップを後目に、俺は大地に拳圧を打ち込み——地下の

マグマ溜まりを刺激して、死火山に活を入れた。

途端に大地が鳴動する。

「バカヤローツ!! その技でプラスじいさんの心臓が止まったんだぞ

!! 今度は俺の心臓が止まるわ!!」

「オレは心臓がふたつあるから問題ないな」

ふたつ纏めて止まることってないの？

ともあれ、そこかしこで地が爆ぜてマグマが噴き出し始めた。

すぐにこの辺はマグマの大洪水となり、地底魔城をその灼熱の下に埋めるだろう。

「ヒュンケルは倒したけど、不死騎団は別にちゃんと滅ぼさないとい

けないからな……。これが手っ取り早いと思つてさ」

「先に説明をしろつつてんだよ、説明を!!」ゴリラか、おまえは!!!」

闘技場の上に3人で避難しながら詰られる。

「なあハドラー。コイツ俺のことゴリラとか言うんだけど、酷くない?」

「貴様ゴリラじゃなかったのか……?」

「お前、黒の核晶の時漏らしてたの忘れてねえからな」

マジで汚いありさまだったよ、あれは。

「つーかダイ、おれ今気付いたんだけどさ、地底魔城に誰か捕まつてる可能性とか考えなかったワケ?」

「人間の気は感じられなかったから大丈夫だよ」

「お前つて筋力以外も人間離れしてて、マジでキモいよな」

その後も俺たちは罵り合いながら、地底魔城が沈む様子を眺めていた。逃げ出すアンデッドがいるかも知れないからね。しっかり確認しないと。

と、そんな時だ。

「な、何じゃあ〜?!」ここは死火山のハズじゃなかったのか!」

謎の老兵士が現れた!

「ああ!? 何で地底魔城がマグマに沈んでやがるんだ! つーかヒュンケルの野郎はどうした!」

謎の半分こ怪人が現れた!

「それがかくかくしかじかで」

俺たちは懇切丁寧に説明した。

「なんだと、ヒュンケルの野郎やられてやがったとは好都合だぜ! 前からあいつは気に喰わなかったんだ! 人間の癖によォー!!」

「マジでね。人間なんだから普通に人間の味方しとけば良かったのに……」

「だろ!?! そう思うだろ!?!」

俺とフレイザードは意気投合した。

「じゃあ魔族のオレも魔王軍に戻った方がいいのか? ダイよ」
「いや、お前は俺の傍にいろや」

「ダイ……」

「ハドラー……」

「見詰め合うのやめろ」

ポップに止められてしまった。

いつでも殺せるようになって！　ってガンを飛ばし合ってただけなの……。

「そんなことより、君がダイくんじゃろう!?　姫が仰っていた、ゴリラの勇者の！」

「だから誰がゴリラだよ！　人間だつっの!!　あ、人間じゃねえや」

ドラゴン
竜の騎士ハーフだからね。

「やっぱりゴリラじゃないか！」

「やっぱりゴリラではないか」

「やっぱりゴリラじゃねえか」

「やっぱりゴリラじゃないんかの」

「ピピーー」

「捻り殺すぞ」

クソどもは黙った。

俺は咳払いをして気を取り直す。

「ともかくだ！　ゴリラだろーがゴリラじゃなかるーが、俺は魔王軍を潰してデルムリン島でじいちゃんやゴメちゃんたちと平和に暮らしたいワケよ。で、たまにレオナが遊びに来たりさ。そういう生活ね。分かる?」

「たまにじゃと?!?!」

バダックじいさんが激昂した。

あ、やっぱ姫をたまにでも呼び出すとか不敬的な?

「姫は君と会おうのを本当に楽しみにしとったんじゃぞ！　もつと頻繁にお招きせんかい！」

「あっはい」

外堀を埋められるって、こういう状況を言うのかな?

「しかしよ、パプニカの都はヒュンケルの野郎が滅ぼしたんだろ?　肝心のお姫さまも死んじまったんじゃねえのか」

俺としてもいろいろあり得んと思うし。

「このゴリラパワー……！ 本当にゴリラの勇者ダイのようね。失礼したわ……。姫さまのもとに案内しましょう」

「釈然としねえ」

「お蔭でお姫さまに会えるんだ。ヒュンケルさまさまじゃねえか」

かくして俺、ゴメちゃん、ポップ、ハドラー、バダックじいさん、エイミさんと兵士、そしてフレイザードの一行は、バルジ島に向かうことになるのだった。

10 恐怖の禁呪法!

「ところで、勇者ダイは魔物使いでもあるのかしら」

気球船で空を行く中、エイミさんがふと訪ねてきた。

「と言うと?」

「だってほら……ゴメちゃんに、魔王ハドラー、氷炎將軍フレイザード、まほうつかいまで従えて……」

「今おれ魔物扱いされなかった?」

ポップは疑問を呈した。

しかし誰も気にしなかった。

「うーん、魔物を……『使う』ってのは違う感じかなあ。ゴメちゃんは友達、ハドラーはペットだし、フレイザードはなんか知らんけどいつの間にか馴染んでるだけだし」

「今オレをペット扱いしなかったか?」

ハドラーは疑問を呈した。

しかし誰も気にしなかった。

「……。おい、ダイ。おれは?」

ポップは疑問を呈した。

しかし誰も気にしなかった。

「おい、それよりも見えてきたぜ……。あれがバルジ島! あそこに
お姫さまがいるってワケかい」

フレイザードが見やる先、確かにバルジ島と、傍らの海にバルジの
大渦が見える。

間もなく気球船は、島中央のバルジの塔の麓に着陸した。

しかし前世から思ってたけど、バルジ島とバルジの塔とうってややこし
くない?

ともあれ気球船を降りると、上から剣呑な言い争いが……。

「どうやら食料のことで喧嘩しているらしい。」

「こいつが悪いんだ! 取り分以上に持っているとうとう……!」

「俺はもう丸一日何も食べてないんだ! このバナナを食べる権利は
ある!」

「バナナだ?!?!?!?!?!」

俺は仲間たちを置き去りにして、ひとりで素早くその場に駆け付けた。!!?!?!?!?!?!

「何だお前!?!」

「ダイ君!?! 来てくれたのね……!」

「バナナがあると聞いて」

「あなたにあげるバナナはないわ」

レオナがマヒヤドの視線を向けてきた。

俺は土下座した。

「大変失礼いたしました。お久し振りです。会いたかった……無事で良かった。レオナ」

「あなたも元気そうね。会えて本当に嬉しいわ」

レオナは赦してくれた。

でもバナナはくれなかった。

島から持ち出したバナナはロモスで尽きちゃったから、そろそろまた食べたいんだが……。

「姫! 今のやり取り……では、この少年が!?!」

「そう、彼がゴリラの勇者ゴリラ、じゃなかった、ダイ君よ」

「流石にゴリラネタ飽きて来ない?」

俺は不平を述べた。

しかし誰も気にしなかった。

ともあれ、かくかくしかじか経緯を説明していく。

「そう、不死騎団は滅びたのね……」

「軍団長もすっかり処刑したよ」

「勇者アバンの一番弟子、か」

レオナは遠くを見る目で呟いた。

「処刑しないで仲間にした方が良かった?」

「え、いいわよ別に。そんな勘違いで暴走するような人、怖くて使えたモノじゃないし」

「あっはい」

可哀想なヒュンケル……。残当だけど。

あつ魂の貝殻マグマの下じゃねーか。今気付いたわ。
まあいいか。

「ともあれ、瓦礫の山とは言えここよりはまだ物資があるだろうし、パ
プニカに帰ろうぜ」

「そうね。帰ればバナナの備蓄もある程度は残ってるはずだし……。
いっぱい食べさせてあげるわ」

「やったあ」

俺は喜んだ。

と、その時だ。虚空が黒く歪み、ズヨヨン——と、小柄な妖怪ジジ
イが現れた！

兵士たちが取り囲む。

「貴様、何者だ！」

「妖魔司教ザボエラ!!! 滅びかけた王家の生き残り、たかが小娘ひと
りの首を取ればオシマイという美味しい仕事をいただきに来た
……っ！ 手柄はワシのモノじゃ!!」

「させるかよ！」

俺は腰を深く落とし——

「メダパニ！」

しかし、ザボエラの呪文を受けてしまった！

しまった、全てがバナナに見える……!!

錯覚だと分かっている、分かっているのに、腹が鳴る。

「くっ、皮を剥くことすらもどかしい……！ だがこれだけ大きくて

美味そうなバナナ！ いっ!たいどれだけの満足感が……!!」

「ちよつとダイ君やめて!!!」

バナナがレオナの声で抵抗している気がする。

しかし俺は気にしなかった。

まず皮を、皮を剥かねばバナナを食べられない……!!!

「やめてって言うてるでしょ!!! こんなところで!!!」

「アバーツ!!!」

俺はバナナの反撃を受けて倒れた。

バカな、頭痛がする……吐き気もだ……。

「この俺が……気分が悪いだど？」

バナナに脳を揺らされて、立つことができないだど?!
て言うかマジに拳が見えなかったんだが……。

バナナに手はないからか。仕方ないね。

「しまった、ダイ君大丈夫?!」

「勇者ダイもいたなら好都合！ 纏めて葬ってくれるわ！」

「そうは行くか！」

萎びたバナナに、多数のバナナが立ち向かっていく。

だが萎びたバナナの放つベギラマで、焼きバナナにされてしまっ
た。

「ダイ！ 無事かー！」

「この妖気は……ザボエラか！」

と、階下から、弱そうなバナナ、不味そうなバナナ、二色のバナナ、
空飛ぶバナナが駆けつけてきた。

「仲間がいたか……！ ってハドラーさまにフレイザード!? おのれ
裏切り者どもめ……！ ここは分が悪いか！ ならばこうじゃ!!」

萎びたバナナが、美味しそうなバナナに——これは、何かの呪法を
!?

「やめろー!!! それは俺のバナナだーー!!!」

「ダイ君?! そんな、あたしを庇って……!!!」

「ぐえええええええええええええええええええええええええええええ

俺は萎びたバナナの呪いを受け——ゴリラになっちゃった!

「ダイーッ！ ひでえ……。名実ともにゴリラになっちゃまうなんて
！」

「ザボエラめ、恐るべき禁呪法を！」

「こいつは厄介だな……。クカカツ」

バナナたちが戦慄する。

そんなことは、今は、どうでもいい。

「お、おかしいのう……。子犬にでも変えてやるつもりだったんじや
が。そしてワシが死ねば呪いは解けんぞ、と……」

「……」

俺はゴリラになってしまった。

俺はゴリラになってしまった……。

ゴリラ……ゴリラに……。

子犬になる呪いでなぜゴリラに……？

俺がゴリラってことなの？ ゴリラが俺なの？

ゴリラごりごり病に冒されてるの？ ごほっ、ごほっ。

「ウホホーッッ」

俺は絶望して、塔から身を投げた。

11 魔王軍総攻撃!!!

ゴリラ呼ばわりは、実際、それほど嫌なワケではなかった。脳筋ぶりに対する揶揄、ただの軽口である。深刻に受け取る方がどうかしてしよう。

周りのアホどもだって冗談で言ってるんだし、俺も冗談で殊更に嫌がってみせていただけだ。

だが本当にゴリラになっちゃった。ウホウホだった。

ザボエラ……ザボエラの呪いで……!!! しかも術者を殺すと呪いが解けないだど!?

俺は絶望した。

絶望して、バルジの塔から身を投げた。

別段、今更この程度の高さで死なないのだが、衝動的な行動だった。

「ダイ君！・ダイ君!!!」

声がする。

呼び声がする。

ふと見ると、バナナが俺にしがみついて、一緒に落ちていた。

人間くらい大きくて、美味そうなバナナだ。

まだメダパニ続いているのかよ。全てがバナナに見える。何ならバルジの塔もバナナの塔に見える。

「ウホホ」

レオナ、と心の中で名を呼んだ。

メダパニが解けた。

なぜか妙に服の肌蹴たレオナがそこにいた。

いや本当、何でだろうね？ 本当にね。

「ごめんダイ君、止めようと思ったんだけど！」

「ウホッ……」

一緒に落ちてりや世話ないわ。

俺はいい。落ちても、俺は死なない。傷ひとつ付かない。

だがレオナは。

「ウホオオオオオオオオオオオオオオオオ」

俺は気合を入れた。

片腕でレオナを引き寄せ、ぐっと抱き締める。

「ウホオラア!!!」

そして逆の手で下向きに拳圧を放ち、反動で——浮く!

まさにトベルーラ!

あとはまた落ち始めるが、もう数回そうやってブレーキをかけてやれば、安全に着地ができた。

「うーん、ウケルーラってところじゃないかしら」

トベルーラだっつってんべ!?

「そんなことより大丈夫? 怪我はない?」

こっちのセリフなんですけど。

ふと塔の上階——寸前まで俺たちがいた場所から、爆発音が響き、炎熱の余波などが飛び出してくる。

「大丈夫かしら……。ダイ君の仲間でしょ? あのやたら顔色悪い男」

ハドラーの顔はそれが地だよ! 魔族の肌色だよ!

「半分凍って半分燃えてる鎧を着た人も、あれ大変そうよね」

フレイザードのそれは鎧じゃないよ! 本人の体だよ!

そーいやアイツある意味全裸なんだな。

あつ俺も今は全裸だわ。ゴリラだから。

服じゃない背囊くらいか、そのままなのは。ブラスじいちゃんが入ってる魔法の筒もその中だ。

物凄い解放感ある。

しかもそれでレオナを抱き上げてるんだぜ!?

心臓バクバクもんだよ。ウホッ。

ともあれ、俺は塔から離れる方向に走り出した。

「ダイ君?! どこ行くの!?!」

いや、まずはレオナを逃がそうと。

何しろ、あそこはもう戦場だ! 殺し合いをするところだぜ。

強い奴が生きて、弱い奴は死ぬんだよ!

傷つけたくないなら、戦場に連れて行っちゃいけないんだ……!!

「ダメ！ 戻りましょう。王女のわたしがいれば、兵士や三賢者の士気も上がる……！ それにダイ君、あなたの力が必要なハズ」

かも知れないけどさあ。

「見せてよ。本当のトベルーラ」

しようがないにやあ……。

俺は塔から離れた距離を助走に使って——跳んだ！

「ウホーツ!!」

「凄いわ!!ダイ君！ 気球船より、ずっとはやい!!」

やめて!!!

ともあれ、蹴りの圧で更に身を浮かせ、空中を駆け抜けてバルジの塔の上階に戻った。

エイミさんは既に倒れ、その傍らにゴメちゃんがいた。護衛のつもりか。

ハドラーとフレイザードもズタボロだ。

ポップはともかく、元魔王軍のふたりがいてザボエラひとりに苦戦するとは思えなかったが——然もありなん、敵が増えているではないか！

元々いたザボエラに加えミストバーン、更に balan までもが……！

ハドラーが呻いた。

「ダ、ダイ……逃げろ……！ balan はヤバい！」

「オレも年貢の納め時ってやつかね……」

フレイザードも諦めムードだ。

ポップはそのフレイザードを盾にしていた。姑息だ。

「ふん！ ワシが手柄を独り占めしようと思ったのに……！」

「何か言ったか？ ザボエラ」

「何でもございません」

ザボエラって balan には敬語なんだよな……。一応同格なのに。

balan が剣を突きつけてくる。

「勇者ダイ！ ザボエラ如き小物の呪法でゴリラに成り果てるとは、何とも見下げたものよ。しかし容赦はせんぞ……！ 人間は滅ぼす！ まずは貴様らからだ……！」

「ウホツ……?」

こいつ、俺がディーノだって気付いていない……?」

デルムリン島での戦いの情報が、魔王軍内で共有されていないのか？ まあ黒の核晶^{コア}を部下に埋めてた情報も含むから、共有できるわけではないのか。

俺は気合を入れた。

「ウホアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ」

あのバナナの木を薙ぎ倒したハドラーへの殺意！

怒りが底力が呼び起こす……！

ヒイイイン。額^{ドラゴン}に竜の紋章が輝いた。

「なん……だと……」

balan は愕然とした。

「私の生き別れの息子が——ゴリラになっているだと?!?!?!」

パパ〜。

「その姿でパパと呼ぶなあああああ!!! まるで私までゴリラのようではないか!!!」

ゴリラ語分かるのかよ。キモツ。

「息子にキモいと言われた……」

balan は膝から崩れ落ちて泣いた。男泣きだった。

「む、息子じゃと……?! 勇者ダイが竜騎将 balan の?!」

「……」

ザボエラは驚愕し、ミストバーンは焦りの空気を出した。

黒の核晶^{コア}の件を隠した結果じゃないの!?! うっかり伝達忘れなの!?!

「ソアラ！ ソアラああああああああああああああ」

balan は泣きながら撤退。完全にメダパニ状態だわこれ。

それを追って、ザボエラとミストバーンも消えていった。

勝った……!!!

と、そこで、片腕で抱いたままのレオナが。

「敵がいなくなったわ……! バシルーラよね?」

最早かつこ物理ですらないと思うんですけど。

「まあそれはいいとして、ダイ君
なんすか。」

「あたしも何言ってるか分かるんだけど……。キモいの
????????????」

えっ。
あ、いや。

決してそんなことは……！

はい。

ね？

「しばらくバナナ禁止ね」

俺は膝から崩れ落ちて泣いた。男泣きだった。

12 繋ぎ回

バナナ禁止は自分で食べるのが禁止という意味らしく、レオナが俺にアーンってするのはセーフだったらしい。

そうこうするうちに呪法が解けて、元の姿に戻った。

俺の中のゴリラが、バナナで満足したから……???

いや俺の中のゴリラって意味分らんけど。ゴリラじゃねえし。

ともあれ、パプニカは復興を始めた。

結構な数の民が逃げ延びていたらしく、何だかんだ復興は早く済みそうである。

とは言え当然ながら死者も大勢いたワケで、やっぱりヒュンケルはギルティーなんだが。

さて、俺たちはパプニカ城内に部屋を貰い、今後の対策を練っていた。

「まず魔王軍の現状について」

「百獣魔団は逃げ散り、不死騎団はマグマに沈んだ。氷炎魔団は？」

ハドラーがフレイザードに聞いた。

「滅ぼしてきたぜ」

何サラツと自分の軍団滅ぼしてんだ、こいつ。

「オレはハドラーさまの作った禁呪法生命体だからな。ハドラーさまが死ねば道連れ……。じゃあ一緒に魔王軍を裏切るしかねえだろ」

「ちなみに魔王軍では、どのような活動？」

俺はインタビューした。

「オレはオーザム王国の攻略を任されていてな。ぺんぺん草一本残さず国を滅ぼすため、綿密な計画を練っていたんだ」

流石は炎の狂暴性と氷の冷徹さを兼ね備えた男よ。

で？

「そしたら召集がかかったから、帰った」

うん？

「計画を練って……？」

「練っただけだ。実行してねえ」

「ノットギルティー」

フレイザードはあからさまにホツと息をついた。

コイツはコイツで緊張していたのか。

微妙に表情が分かりづらんだよな……。

しかしそうか、俺は原作よりも早く魔の森を抜けている。とにかく真っ直ぐに突っ切って、迷わなかったからな……。それでクロコを倒すタイミングが早まり、6大団長集結の巻も早まったのか。

いやハドラーがこっちにいるのに、原作通りに進むのは意味分からんけど。原作の修正力ってやつ？ まあ少なくともミストバーンがクソ適当な仕事してるのは分かる。

「でもフレイザードだったけ、つまり裏切り者なんでしょ？ 本当に信用できるのかしら」

「ちよつとレオナさん！ 話を混ぜっ返さないで!! ほら、俺もバナナ食べたいから」

「仕方ないわね……」

今だ！ 俺がレオナに餌付けされているうちに会議を進めろ！

「で、残りの軍団長が、この間のバルジの塔で一気に襲いかかってきたワケか。おっかなかったな……」

ポップは震えた。

「でも、そのひとり……バランだったけ？ アイツがダイの親父さんだったなんてな。すげえ強かったし、味方にできねえか？」

ポップが珍しく建設的な提案をした。

しかしハドラーは首を振る。

「息子がゴリラと化して、あれだけ嘆いていた男だぞ。もし素でもゴリラだと知れば、味方どころか、親子で骨肉の争いを演じる破目になるかも知れん」

「誰が素でゴリラだよ」

「いいじゃない、ゴリラ。あたしゴリラ好きよ」

そういう話じゃないから黙っててレオナさん!!!

でも嬉しい。

いやゴリラじゃないけどね?! ないけど!!

「でもそのバランも軍団長なんでしょう？ 大量殺人した人を味方に
するのはちよつと……」

「リンガイア王国を滅ぼしたらしいぜ」

レオナの懸念に、フレイザードがリークした。

これはギルティーですわ。

「じゃあバランは殺すつてことで。次に——」

「待つてダイ君。バランはあなたの紋章を見て息子だつて言ったじや
ない？ その紋章は何なの？」

あー……。

「教えてよ、ダイ君！ やつぱりゴリラの紋章なの？」

「ゴリラじゃねえつつてんべ!? だいたいどこがゴリラに見えたよ
!!」

「こう、ゴリラを上下逆にしたような」

レオナが上下逆のジュエスチャーをする。

ええ……? そう見えるか……? ?

紋章の絵を描いてもらい、上下逆にしてみる。

……ゴリラの後ろ姿……? ?

こう、あの、普段なら下端の竜の顎の部分が、今はゴリラの肩から
頭の三角形めいたラインに……見えないこともないような……。竜
の角部分が手足で。!!!!

「つてあり得ねえから!!!」

「えー残念」

!!!!!!

残念じゃないよ。

危うく洗脳されるところだわ!!

「これは竜ドラゴンの紋章だよ。分かるべ？」

「ドラゴンドラゴンとゴリラつて似てないかしら」

どこが?!?!?

ラーとダーマくらいかけ離れてない?

「どっちも『ゴ』と『ラ』が入ってるわ」

無理やり過ぎイ!!

「もう、ワガママねえ。まあいいけど、結局このドラリゴンの紋章つて

何なの？」

「サラツとゴリラ混ぜんな」

前後逆なのが小賢しいわ!!!!

しかし、実際、何なのか。

原作知識はあるものの、この世界でも同じという保証はない。

だから、

「さあな……。主に俺の怒りに反応して出て来て、めっちゃパワーアップするみたいだな、そういうアレだということしか……」

と答えるしかなかった。

「そうなのね……。うーん、ゴリラ——じゃない、ゴリラ——じゃない、ゴリラ——じゃない、ドラゴンの紋章なのよね。竜信仰のあるテラン王国なら何か分かるかも……」

何でそんな言い間違ったの？ 何でそんな言い間違ったの？

しかしテランか。

「じゃあ行くか」

「行きましょう」

行くことになった。

ってレオナさん唯一残った王家なのにフットワーク軽過ぎない？

「このくらいじゃないと、ダイ君についていけないもの」

いやたまに俺があなたあのポケについていけないんですが。

「次の行先が決まったか……。しかしオレは別行動させてもらう」

ハドラーが述べた。

「どこへ？」

「オレもレベルアップしないと、この先生きのこれないだろう。人間で言えば、オレは武闘家であり魔法使い……。師匠に当てがある。しばらく修行する」

「オレも別行動だ」

フレイザードが述べた。

「鬼岩城の様子を窺ってくるぜ」

「そうやってこっちの情報を持ち帰るつもり？ そうはさせないわ！」

猛るレオナを、俺は押さえた。

「だからやめてレオナさん!! ホントに疑わしく思えてくるから!! フレイザードの炎と氷の鎧を着てみたかったのに鎧じゃなくてガツカリしたのは可哀想だと思っけどさあ!!!」

フレイザードは悪くないからね!!? それ!!

「ダイ君が! デートしてくれたら許すわ」

「何で俺!?!?!」

デート!?!?!することになった。

13 超竜軍団もう来ないで

「待ってレオナさん!!! ひとりで先走らないで!!!」

「あたしたちのデートを邪魔したのよ!? 天誅を下してやるわ!!」

ベンガーナ王国。

都会と呼べるこの町で、服を見たり食事をしたりと、俺は自分でも意外なほど普通にデートを楽しんでいた。

が、そこにドラゴンの群れがやって来たのだ。

レオナは激怒した。必ず、かの邪知暴虐のドラゴンを除かねばならぬと決意した。

レオナには政治が分かる。しかし、人と人との温かな繋がりの大切さにも、人一倍に敏感であった。

「ベギラゴン!!! ベギラゴン!!!」

「いや出てない! 出てないから!! まず逃げよう!? ね!? 俺が倒すからさ!!」

俺はレオナを抱え、彼女を避難させようと走り出す。

しかしレオナは後ろを向いて、なおもベギラゴンを撃とうとする。

「ベギラゴーンーン!!!」

めっちゃ出た。

ドラゴンの群れが焼け死んだ。

「やったわ!! 見て見てダイ君!」

「ええ……」

同時に俺の魔法力が減る感覚があった。

黒の核晶^{コア}を食べて膨大な魔法力をゲットしたはいいけど、呪文契約が全然出来なくて、宝の持ち腐れだったんだよな……。

しかしなんか変な回路が繋がってしまったようである。

「あ、でも、ちよつと、クラツと来たわ……」

そりゃ身の丈に合わない大呪文を使えばね。

あとは俺に任せろ。

残るのはヒドラだ。

近付いて炎を吐いてきた。

俺は掌圧でそれを吹き散らし――

「あつ」

風の余波でレオナのスカートがめっちゃめくれた。

レオナは咄嗟に手で押さえたが、遅かった。

周りの避難民のうち、男たちの視線がこつちを向いていた。

めっちゃくちやガン見していた。!!

「うおおおおおおおおおおお!!!!」

俺は激怒した。必ず、かの邪知暴虐なヒドラを除かねばならぬと決意した。

俺には性欲は分かる。しかしひとりの乙女に恥じらいを強いた罪には、人一倍に敏感であった。

いや半分は俺のせいだけでも!!!!!!

「オラア!!!!」

レオオオを背に庇いながら、八つ当たり気味にヒドラを正拳突きで消し飛ばした。

怒りのあまりか、額には竜の紋章ドラゴンが輝いていて――消えた。

これで超竜軍団は片付いたか。

周囲の住民も避難をやめ、瓦礫に挟まった人を助けようなどとしている。

誰もこちらを見ていなかった。

「何よ……!!!! ！ダイ君に一言お礼くらい……!!」

みんなはレオナの方を向いて言った。

「!!!!」
「!!!!」
「!!!!」
「!!!!」

「やめて!!!」

そりや!!!いいモノ見えたからね。仕方ないね。

俺はそり!!!の辺の壁に目を向けた。

「いるんだろ?! 出て来いよ」

「……」

キルバーンが出てきた。

「おおかた、人間どもを俺の力で恐怖させ、排斥の流れを作ろうとしたんだろが……残念だったな。人間はそんな謀略に負けない!!!」

「いやカッコいいこと言ってるけど、性欲に負けてるよね？」
「はい」

これはちよつと言いつい訳できない。

レオナは顔を真っ赤にしていた。

可愛い。

「まあいいさ?! 見たいモノは見た……」

「レオナのを?!?!」

「やめてくれないか、ボクをスケベキャラにしようとするのは!!
の紋章の話だよ!!」
竜

何だ、そうか。

キルバーンは咳払いをして続けた。

「全く酷い父親だと思おうよ……目の前で紋章を見たのに、もう一度
しっかり確認したいだなんてさ……。いくらゴリラだったからって」
「思い出させるな!!」

「ウフフツ。ともあれ、この死神キルバーン……今回はここまでさ。
次は地獄で会おう……!!」

キルバーンは壁をすり抜けるように消えていく。

俺は壁ごと筆り取るようにキルバーンを掴んだ。

「えっ」

「言いたいことだけ言って逃げてんじゃねえ!!」

引き摺り出す。

「瓦礫を片付けるのを手伝え。今回はそれでキャラにしてやる」

「断つたら……?」

「お前がロリコンでホモだって噂を世界中にばら撒く」

「やめてくれ!!! ボクの妖しい魅力が台無しじゃないか!!!」

キルバーンは焦った。

こいつめちやくちや気取ってるから、そういうの気にすると思つた
わ。

ここで倒そうとして、黒の核晶コアが万一爆発しては困る。流星に魔界
のマグマ血液ごと喰うのは無理があるだろうし……。決着はお預け
だ。

と、キルバーンが話しかけてきた。

「ところで勇者ダイ君」

「なん？」

「君は見たのかね？ レオナ君のスカートの奥を」

「……!?」

レオナが赤い顔で睨みつけてくる。

俺は首を振った。スカートが翻ったのは見えたが、その奥までは……角度の問題で……。

「ウフフツ」

「キルバーン……テメエまさか……!」

こいつやっぱり見てんじゃねえか!!!

「教えようか？ 何色だったか。可哀想にねえ！ 自分で見られなかったなんて!!」

しかもミステリアスキャラをかなぐり捨ててまで、俺を小馬鹿にしようとする!!?!?!?!

「オラア!!!」

俺は漣もなくキルバーンの脚をへし折ると、顔面を両手で掴んだ。

額には竜の紋章が燦然。

「ここで呪法 毘 発動——あれ?」

そんなもん、攻撃のために踏み込んだときに踏み潰したわ!!

「ドルオーラー————————!!!」

そのまま上空に向けて竜闘気砲呪文をブツバ。

隠された黒の核晶の爆発は闘気流に押し流され、ただ空にキノコ雲を浮かせた。

被害者ゼロ。

「ひっ……!!」

「ば、化物……!」

「度を越えた脳筋……! ゴリラ、恐るべきゴリラだ……!!」

「ゴリラ……!」

「ゴリラの騎士……!?!」

おい、誰だ今最初にゴリラって言い出した奴。

このベンガーナじやまだ広まってないハズだろ!?

見れば一つ目ピエロが、モシヤスを使い群衆に混じって、立ち去っていくところだった。

ピロロか！ あいつ！

群衆はすっかり俺に怯えていた。

「ダイ君……」

レオナは深刻そうな顔をして……

「戦ったらお腹空いたわ。無事なお店を探しに行きましょう」

「あっはい」

俺はレオナには勝てない。

そう悟った。

14 紋章共鳴の脅威!!

あの後ベンガーナでデートの続きを楽しんだ俺たちは、今度こそテラン王国にやって来た。

ナバラとメルル？ 会ってない。

住民たちにいるいろと話を聞いてみると、最終的に湖に案内された。

ここに竜の神の魂が眠るとされる神殿が沈んでいるという。

俺とレオナはふたりで湖に潜り、神殿を目指した。

いやだってレオナひとりで置いてくのもアレだし……。

湖底。

門は固く閉ざされており、開ける機構が存在しないようだ。

しかし門に嵌った巨大な宝玉？に触れると、吸い込まれていく感覚

——あつレオナと繋いだ手が引つかかった。

「はあああああああ!!」

俺は紋章を出し、ドオオニツクオーラ竜鬪気で自分ごとレオナも覆った。

すると、ふたりで通ることが出来た。

結構ガバいな、こいつ。粉碎する必要がなくて良かった。

内部で竜水晶と出会う。

「誰だ……!?!」

こいつ喋るぞ!!

「ダイです」

「レオナよ」

「竜水晶だ」

「バラんだ」

なんだと!?

慌てて振り返る。そこには髭の偉丈夫が……!

レオナと繋いでる手の感触に夢中になって、まるで気付かなかつ

た……!!

「ディーノ……我が子よ……。迎えに来たぞ」

バランは語った。

ドラゴン
竜の騎士とは何か。

そして自分にどんな悲劇が起きたのか。

内容は原作通りだ。

竜水晶の出番はもうなかった。

何のために来たんだ、ここまで。

で、結論。

「私の部下になれ!! 共に人間どもの世界を滅ぼすのだ!!」

「いいえ」

俺はキツパリと断った。

「なぜだ! お前もゴリラ扱いで迫害されていると聞いたぞ!」

「真面目にゴリラとか言い出すんじゃないやねえよ!」

笑うだろうが!!

「俺はレオナとか、ブラスじいちゃんやゴメちゃん……大切な奴らと平和に暮らしたいだけなんだよ。だから邪魔な魔王軍は潰すけど、人間は別に……」

「人間がいる限り、平和には暮らせんぞ!! くっ……! 人間に飼われたゴリラに成り果ておつて!!」

ゴリラ言うなっつってんべ!?

ともあれ、どうやら戦闘の気配である。

balan は剣を抜き、俺は手を繋いだままのレオナを背後に庇った。

「足手纏い!! を連れて戦えるか、ディーノ!」

「オラア!!!」

「おげッ!!!」

神殿の外まで吹っ飛ばした。

湖も出て地上に戻り、仕切り直し。

「ごほっがはっ……!! バカな、ドラゴニックオーラ 竜 闘 気をまだ纏っていないとは言

え!! たった一撃で……私がここまで……!!」

balan は既に膝をついているが。

「だが竜の騎士としては私が上のハズ!! うおおッ!!」

balan が紋章を出した。

俺はレオナを逃がすと、自分も紋章を出した。

「なにッ!? そ、その紋章……ではお前が……!?!」

「ああ。俺がディーノだ。親父、あんた大魔王バーンの呪いで記憶を消されたんだよ」

「えっ!?!」

レオナがめっちゃこっちを見てくる。

今は静かにしてて!!

「バーン! 冥竜王ヴェルザーと魔界を二分していた、あの男が……!」

「母さんもバーンが殺した」

「ソアラ……そんな……! ついさつきまで、共に……!!」

「俺とも生き別れになって、今再会したところなんだ」

「そうだったのか……! すまないディーノ、寂しい思いをさせてしまったのだな……!!」

レオナがめっちゃジト目でこっちを見てくる。

お願い、もうちょっと黙ってて!!

「更にぶつちやけると、親父あんた大魔王に操られてたんだよ。危うく俺と殺し合いだ」

「なんだと!?!」

「何とかその支配は解いたんだけど、すると支配されてた間の記憶はなくなるみたいだな」

「おのれバーン!! 赦さん……!! 絶対に赦さんぞ!!!」

balan は怒りに燃えた。

「ところで人間をどう思う?」

「脆弱で、時に愚かだが、温かみもまた持つ、慈しむべき生き物だ」

「人間を滅ぼそうとするバーンを一緒に倒そうぜ!! 親父!!」

「ああ!!」

俺たちは固く握手を交わした。

balan が仲間に加わった!

「——って騙されるかあッッッ!!!
今記憶が戻ったわ!!!」
ダメか。

15 人は皆心にゴリラを飼ってる

「危ないところだった。まさか私の記憶が吹き飛ばとは……!!」
「撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ」

俺はキメ顔で述べた。

「つか親父も昔は温和だったんね？」

「人間を理解していなかったからだ！ 奴らは身勝手に卑劣で、どうしようもないゴミだ!!」

「それで人間を滅ぼすって？」

「そうだ！ お前のためでもあるのだぞ、デイナー……!!」

そう言われてもなあ。

俺は疲れたので、レオナの膝枕で休み始めた。

「その小娘も、今はそうやってお前の傍にいるが……やがて引き離されるだろう！ 私とソアラがそうだったように……!!」

「いや、そういう相手は殴るから」

「なに……？」

殴らない理由がないワケだが。

バルンは何を不思議そうに？

うーん、これは……。

「親父の失敗はいくつかあると思うけどさ。そのひとつに、『殴らなかったこと』があると思う」

バルンは最後にブチギレるまで、人間を殴ろうとしなかった。

疑惑だけで理不尽に追放されても、駆け落ち先で発見されて囲まれた時も、処刑の時も。

「殴れば良かったんだよ。斬るとかじゃないぜ。殴るんだ。ふざけんな死ねつつつて、死なない程度にな」

「何だ……それは？ 何を言っている……？」

「気に入らなかつたら、殴る。俺は怒ってんだぞ、ってちゃんと伝えるんだよ。言葉で、行動で。人の本気なんて、なかなか伝わりにくいんだからさ。本気で怒ってるって、拳で伝えなきゃ」

バルンは見るからに当惑。

俺の言ってること、そんなに分からないか？

それともレオナに耳搔きされながら語ってるから？

「だが、私が殴れば……人間は死ぬぞ」

「だから死なない程度に加減すんだよ！ 不器用かよ。いやよしんば殺しちゃまったとしても、アルキードだつて、国ひとつ吹っ飛ばすよりは遥かにマシだったろ。最後の最後に大爆発しねえでさ、ちよつとずつ怒りを見せんだよ。相手の譲歩か屈服を引き出すんだよ。ぶん殴ってな」

「そんな野蛮な……」

俺とレオナは揃ってジト目を向けた。

人間滅亡を掲げる男に野蛮とか言われたくねえわ。

バランは呻いた。

しかしだ。

「野蛮で何が悪い？ 人間だって動物だ。ドラゴン 竜の騎士だってな。多かれ少なかれ、野蛮な面はあるんだよ。それを否定したって、何もいいことはねえ。殴った方が分かり合えることって、あるんだ」

「殴る……殴るか……」

バランは握った拳を見下ろした。

「親父は人間をゴミクズみてーに言うけどさ、実際に親父を虐めたのって王とその家臣くらいだべ？ 市井の民とどんだけ交流したよ。子供は？ 赤ん坊は？」

「……特にしていなかった」

「なのにそいつらも纏めて殺したんだよ、アンタは。何の罪もない奴らをな。その意味でも、殴るべきだったんだ。王や家臣を、ひとりひとり、殴っていくべきだったんだ。それなら関係ない奴を巻き込まないからな」

俺は虚空にパンチを繰り出してみせた。

こうやって殴るんだ、とでも言うように。

いや寝そべってんだけどさ。

「ディーノ」

「なん？」

「お前は脳味噌まで筋肉なのだな」

今そういう話の流れだった???

「考えたこともなかった。殴れば良かったなどと……。ゴリラの勇者と呼ばれるだけのことはあるのか……」

「人間はみんなゴリラなんだよ。心にゴリラを飼ってる。大なり小なり……。気に入らない奴を殴りたい、問題を腕力で解決したい、そんな衝動をな。しかし強く抑えつけられたゴリラは、時にゴリラを超えてしまう。スーパーゴリラ人だ」

「スーパーゴリラ人」

何言ってるか分からないって？

奇遇だな、俺もだよ。

「親父、アンタがそれだ。それは全てを滅ぼす災厄だ。人間を根絶やしにしたとして、そしたら今度は、きつと魔族の邪悪さに気付いて滅ぼすんだろうぜ。で、次は竜か？^{モンスター}怪物か？ 世界が空っぽになるぜ。それが親父の望みかい？」

「そんなワケがあるか！ 私の望みは……。私はただ、世界を良くしよう……」

「だったら、滅ぼしちゃダメだ。殴るんだ。気に入らない奴を、気に入らない奴だけを殴るんだ。でなきや親父、世界を良くするつもりで、最悪にしちまうぜ」

いつの間にか、 balan は膝をついていた。

震えている。

怒りだろうか？ 悲しみだろうか？

「スーパーゴリラ人になっちゃいけないえ。災厄になっちゃな。ただのゴリラがいい。人間はゴリラでいるのが自然なんだ。それが正常なんだ」

「ゴリラが……。正常……」

^{ドラゴン}「竜の騎士は人間の心を持ってんだべ？ じゃあ親父も、ゴリラだ。ゴリラであるべきだ」

「私もゴリラ……」

balan は目が虚ろになってきた。

「気に入らなかつたら、殴る。拳を握り固めて、ガツと殴るんだ。それなら、関係ない奴は巻き込まない。災厄じゃない、ただの喧嘩だ。平和なもんだ」

「私は……私は、間違っていたのか……？」

「ああ。だがやり直せる。そうじゃあないか？ ゴリラとして、再び新しい人生を歩き出そうぜ。親父……。俺と一緒に！」

俺はレオナの太腿にほっぺをスリスリしてから、決然と立ち上がった。

膝枕で体力を回復していたのだ。

バランスに右手を差し出す。

握手だ。

「ダイーノ……すまない、すまなかつた……！ なるう！ 私も……ゴリラに!!」

親父は俺の手を握った。

隙だらけだ。

俺はその手を引き寄せて、反対の手でぶん殴った。

「つてそんな美味い話があるかオラア」

「ぬわーっ!!」

バランスは粉々に砕け散った。

レオナが寄り添ってくる。

「良かったの？ ダイ君。お父さんを……」

「いやアルキード吹っ飛ばしてリングイアも滅ぼしたとかいうスーパーゴリラ人はちよつと……。下手に改心されても気分悪いって言うかき。死ぬ以外に詫び方ないべ」

「そうね」

レオナは俺の手を握ってきた。

バランスとは全然違う手だった。

「お腹空いたわね。ハンバーグでも食べましょうか」

「人ひとり目の前でミンチになったばっかだけど」

「やっぱレオナには勝てない気がするわ、俺。」

「どうしてこんな女の子になっちゃったのか……」

16 さらば！ 魔影参謀ミストバーン

それから暫しの時が経った。

魔王軍の侵攻はおよそ止まっていた。

事件と言えは――

balanさまの仇！ とか言って突撃してきた竜騎衆なる3人組をぶっ飛ばしたのがひとつ。

そういえば原作通りならロモスで武術大会あるな、と思っ行って見たら、ハドラーが閃華裂光拳で超魔ザムザをぶっ飛ばしていたのがひとつ。いやお前それマアム……。つかホイミ契約できたの？

そしてもうひとつ、レオナが世界会議^{サミット}を発案――しなかったこと。

どうも俺の手綱を握ったことで満足感を得ているらしく、わざわざ『自分にしか出来ないこと』を追加で探そうとはしなかったのだ。既にあるからね。

そんなワケで、魔王軍対策会議は、パプニカにおいて身内だけで行われた。

「裏切り者のフレイザードの調査によると、鬼岩城は歩いて死の大地に向かったようね」

あの、レオナさん、それだとまるでフレイザードが俺たちを裏切ったみたいなんですけど。

いつまで根に持ってんだ。そんなに氷と炎の鎧着たかったの……？

「あの城が歩くとはな……。しかしつまり、死の大地が真の本拠地とということか？」

「ハドラーさまも知らなかったのかい。バーンってのはとんだ秘密主義の大魔王だな」

ハドラーとフレイザードがしみじみと言った。

レオナが続ける。

「そこに殴り込みをかけようと思うわ。敵の軍団が半壊した今、再建される前の今がチャンスのはずよ」

「遂に最終決戦か……」

俺もしみじみと言った。

短いようで短い戦いだっただな……。

残る敵は——えー、バーン、ミストバーン、キルバーン。ザボエラ。マキシマムもか？ 鬼岩城も来てないな。

「突入メンバーは、まずダイ君」

「おう」

俺はバナナを食べた。

「ハドラー」

「必ず野望を挫いてやる、バーン！」

ハドラーは怒りに燃えた。

「フレイザード」

「クカカツ、これで地上を救えば最高の栄光だな……！」

こいつ善悪どうでもいいんだな。

「そしてあたし。皆で力を合わせて頑張りましょう！」

「おれは!?!」

ポップが不平を述べた。

「おれだってマトリフ師匠のもとで修行したんだぜ!?!」

そういえばハドラーが見付け出して、ボコボコにされながら何とか弟子に取ってもらったんだよな、マトリフさん。

その後ハドラー本人は更にブロキーナ老師のところに行ったけど、マトリフさんは引き続きパプニカでフレイザードやポップの面倒を見てくれていたのだ。

「でもポップ君に出来て、フレイザードに出来ないことってないじゃない」

レオナの言葉のナイフが、ポップの胸に刺さった。

ポップは死んだ。

俺はフォローすることにした。

「ポップには、パプニカを守っていて欲しいんだ。お前だから信頼して任せられる……!?! そうじゃあないか?」

「ダイ……!! そうだな、一緒に冒険を潜り抜けてきた仲間だもんな!」
「まあお前が役に立ったことは殆どなかった気がするけど。ロモスで

雑魚掃除したくらい?」

俺の言葉のナイフが、ポップの胸に刺さった。

ポップは死んだ。

ともあれそういうワケで、俺たちは死の大地に向けて出発するのだった……!!

そして到着した!

鬼岩城^{!!!}(身長145m)が出迎えてくれた。

「オラア!!!」

紋章を出し、拳圧で消し飛ばした。

で、地面をこんこん叩いて、反響で地下の様子を探る。

「この辺だな。オラア!!!」

拳で穴を開けた。木魔宮らしきモノが埋まっていた。

侵入していく。!!!

「これ、オレたち要るのか……?」

「考えるな、ハドラーさま。栄光のためだ」

魔界の怪物^{モンスター}がいつぱい襲ってきた。

奥にザボエラがいる……。奴が指揮しているようだ。

「出番だな!!!」

「ここはオレたちに任せて先に行け!!!」

元魔王軍^{モンスター}どもが急にイキイキし始めた。

俺は怪物^{モンスター}を纏めて吹き飛ばす寸前だった拳を、そつと引つ込めた……。

「死ぬなよ、アホども」

「お前もな。アホゴリラ」

「バーンの首は、粉々にせずにもぎ取ってくるんだぜ! 栄光には首級が必要だ」

温かい声援を受け、俺はレオナを抱えて敵の群れを突つ切った。

そして進む先で——ミストバーンが現れた!

「バーンさまはお会いにならぬ。消えろ! ゴリラ!」

「それを真正面から挑んで言うお前もゴリラだべ。この脳筋が!」

俺たちは罵り合い、そして殴り合った。

これが凍れる時間の秘法か！ 正拳突きが通じない奴には初めて出会った。まるでダメージの通った感触がない。

一方、俺の気合防御を前に、ミストバーンもどうしようもない。

「こうなったら空——あれ牙殺法の技名何だっけ……。まあいいや空裂斬!!!」

「グワーツ!!」

俺は空の技でミストの暗黒闘気に攻撃した。

だが咄嗟に内側に引っ込んだのか？ トドメを刺せた手応えではない。

そして奴は——闇の衣を脱ぎ捨てた!!!

「イケメンじゃねえか死ね」

「この姿を見た者には、速やかな死が待つのみ……!」

俺たちは更なる殴り合いを演じた。

だが相変わらず、俺の拳は通じない。

一方で俺は、

「ぐえっ……!!」

殴られてダメージを受けるなど、修行時代以来では？

口の中切ったわ、いてえ。

「ダイ君!! 後ろ!!!」

あまつさえ、大鎌が突如空間を割って現れ、俺を後ろから……!!

キルバーン！ 人形は吹っ飛ばしたが、ピロロは無事だった。そして

てこれはジャツジの鎌!!

俺は咄嗟にミストバーンを掴み、立ち位置を入れ替えた。ダメージはなくても、こういうことは出来るのだ。俺の方が力や素早さは上だし。

大鎌はそのままミストバーンを捕まえ、そして異空間に消えていった。

「……」

「……」

少し待ったが、帰ってくる気配がない。

まさかとは思うが……ピロロはキルバーン2号機をジャツジ空間

に送り込んで——首を刎ねられても死なないから敗者扱いにならず、ミストバーンは首を刎ねること自体が出来ず、そこから先に工程が進まない脱出不能バグに陥っている、のか？

そしてたぶん、キルバーン2号機を用意するのに忙しく、ジャツジの改造はしていなかった……。

……。

「行きましょう」

「ああ」

ミストとキル、永遠に仲良くね……。

あああ!!!!!!
あああ!!!!!!
悪は滅びた。
完